

奄美大島北部、 笠利湾における貝類知識 エリシテーション・データをとおした人-自然関係の記述

Knowledge of Shellfish on the Coast
of Kasari Bay, Northern Amami Island

飯田 卓・名和 純

はじめに

①研究の背景

②方法

③結果1 喜瀬在住の60代女性2名における貝類知識

④結果2 他のインフォーマント3名による追加情報

⑤考察

⑥結論

【論文要旨】

民俗の変容が叫ばれ始めた高度成長期を境として、日本各地の暮らしはさまざまな局面において変化してきた。とくに、人びとの生活と自然との関わりは、国土利用の大幅な改変のため、現在も激しい変化にさらされている。本稿では、とくに改変の著しい干渉と人の関わりの実態を報告するため、人びとの貝類知識の記載を試みた。

また、記載された貝類知識の分析において、核心的な知識と周辺的な知識という対概念を提示した。前者は、①身近な自然景観を舞台として、②さまざまな活動に継続的かつ反復的にたずさわるなかで、③直接的な経験として得られる知識である。このため、核心的知識は、地域の自然環境と社会的交渉を反映する。いっぽう周辺的知識は、まれに訪れる土地での観察のほか、知人からの伝聞や、出版・放送をはじめとするマスメディアなど、さまざまな回路を通じて獲得される。こうした知識は、地域社会の内部で共有されることが少なく、個人的な関心に沿って深められる性質のものである。これまでの民俗知識の記載においては、両者が区別されることはあまりなかったため、民俗語彙の羅列に終わることが少なくなかった。しかし、こうした知識の重層性に留意するなら、具体的な人と自然の関わりを同時に提示することもできよう。

干渉の生物に関する実態報告は、消滅の危機にある民俗を文字記録にとどめるだけでなく、今後の干渉利用のあり方を検討するための材料を提供する点で大きな社会的意義をもつ。しかし、水陸両域にまたがる干渉の研究には特有の制約が多く、方法論的な課題を抱えている。本研究で用いたのは、生物標本を提示しながら聞き込みを進めるというエリシテーション法である。この方法論は、制約の多い干渉生業研究において、少なからぬ成果をもたらすと期待できる。